



選手らの受け入れのために用意した搬送のスペースで打ち合わせをする村上副院長ら＝中川区の名古屋共立病院で

選手ら手当てへ 診療体制を強化

大会指定の名古屋共立病院

アジア・アジアパラ大会（愛知・名古屋大会）に向け、選手らのけがや体調不良の手当てをする医療関係者も準備を進めている。外国人患者の対応で実績がある名古屋共立病院（中川区）は診療体制を強化し、選手らの受け入れに備える。

アジア・アジアパラ

両大会は経費削減のため選手村を建設せず、通常なら併設される総合診療所もない。そのため、県内外の約70医療機関が大会指定病院として受け皿になる。

競技会場や宿泊施設の医務室や救護室で対応が難しい場合は、組織委が手配する車両で選手らを大会指定病院へ運ぶことになる。緊急時は救急車で搬送する。

（大野沙羅）

大会指定病院の一つ名古屋共立病院は、日常から英語や中国語、インドネシア語など最大6カ国語に対応できる通訳が常駐し、延べ2万人以上の外国人患者に対応してきた。

大会期間中は24時間体制で軽症患者を受け入れる。

選手らのプライバシーを守るため、通常の救急搬送とは動線を分け、別のスペースを確保する。臨時で増員が必要になるため、新たに職員を雇用した。

競技に臨む選手を支援しようと、けがの早期回復のために血液中の酸素量を増やす高気圧酸素治療（HBO）の予約枠も、通常の5枠から8枠に拡大する。

村上栄司副院長（61）は「日常の診療を大切にしながら、選手らやインバウンド（訪日客）の診療にも全力で取り組みたい」と話している。